

教育的ニーズのある児童への 言語活動における支援の在り方について

— 算数科の授業を通して —

土 山 幸 一¹

今日「かながわの支援教育」の具体的、効果的な取組みを推進することが一層求められている。本研究では学習面に不安感の高い教育的ニーズのある児童4名に注目し、全体授業の中で学習形態の工夫や個に応じた支援策を取り入れた授業づくりを考案し、算数科の授業で実践を試みた。その結果、児童主体の言語活動が展開され、対象児童について効果が確認された。

はじめに

神奈川県教育委員会（2008）は「支援教育」について「障害の有無にかかわらず、さまざまな課題を抱えた子どもたち一人ひとりのニーズに、適切に対応していくことを学校教育の根幹に据えた教育」としている。また、「かながわ教育ビジョン」（神奈川県教育委員会2007）の中でも「共に育ちあう教育」が重点的な取組みに位置づけられており、あらゆる子どもの教育的ニーズに応じた、よりよい支援が一層求められている。文科省もインクルーシブ教育システム構築につながる具体的な実践を求めている。

今日、通常の学級には様々な教育的ニーズのある児童が在籍しており、学校現場では日々努力が続けられている。その支援の方法は様々あるが、主に個人や少人数への指導など、ニーズのある児童を対象とした個別支援が中心である。それに対して、通常の学級集団を生かした、児童相互の関わり合いのある授業づくりの取組みは、今後の課題となっている。

本研究では、通常の学級における授業の中での工夫や個に応じた支援策を取り入れて、言語を介した児童相互の関わり合いのある授業づくりを考案し、実践を試みた。その過程で、学習面に不安感の高い教育的ニーズのある児童の変容を臨床的にとらえ、考察を行った。

研究の内容

1 テーマの設定

今日、学校現場では「言語活動の充実」について研究・実践が重ねられている。所属校においても、平成

1 座間市立相武台東小学校

研究分野（一人ひとりのニーズに応じた教育研究支援教育）

22年度～平成23年度の2年間、座間市教育課程等研究推進校の委託を受け、言語活動の充実をテーマに研究を進め、筆者も研究主任として携わった。日々刻々と変化する社会を生きる児童にとって、生きる力を支える思考力・判断力・表現力につながる言語活動の充実が重要である。しかしながら、通常の学級に在籍し、教育的ニーズのある児童の中には、言語活動に大きな苦手意識をもっている児童も少なくない。

そこで、本研究では、学習面に不安感の高い、教育的ニーズのある児童に注目し、通常の学級における授業の中で、言語活動における効果的な支援の在り方を考えたいと思い、テーマを設定した。

2 研究の目的

言語活動の充実のためには、基礎的な言語の技能の育成が重要である。所属校においても小学校6年間で、言語活動について育てたい力の系統表を作成し、あらゆる教育活動の中で日常的な取組みが行われている。具体的には話し方・聞き方のルールやマナーの浸透、発表の仕方の基本（型）の定着などである。学級経営の観点から見ても、低学年からの継続的な言語活動の指導が大切であり、それらの実践の積み重ねが、温かで親和的な学級・学校風土を築いていく。所属校での研究授業をはじめ、他校の研究会等で筆者が参観した幾つかの授業も、フォーマルな言語活動を介した活発な発表が多く、効果も認められた。ただその反面、このような発表が児童の実態から言語活動の充実の手立てを考えるとというよりも、はじめに実践ありきになっていなかったかという反省が自身の経験からも感じられる。つまり、フォーマルな言語活動による教師主導の授業実践によって、例えば、基礎学力が低く、考えをまとめたり表現したりすることが苦手な児童の学習意欲を一層減退させてしまうという面もあったのではないかと考えるのである。また、様々な教育活動において、それらニーズのある児童への支援方法は、授業

場面を離れての個別支援に頼りがちである。その成果を否定するものではないが、現実として通常の学級に在籍する教育的ニーズのある児童にとって、学校生活の主たる場は在籍する学級である。児童の集団への適応を考えれば、通常の学級での授業の中においても、支援策を考える必要がもっとあるのではないかと考える。

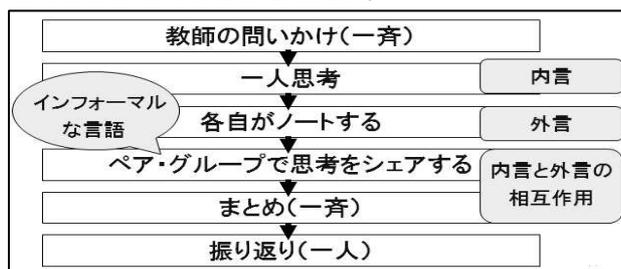
そこで、本研究の目的は「通常の学級で学習面に不安感の高い教育的ニーズのある児童を対象に、児童相互の関わりを構造的に取り入れた授業をつくる。その中で言語活動が苦手な児童も参加しやすいインフォーマルな言語を介した学習活動を行い、そこで生じる児童の変容を臨床的にとらえ、考察していくこと」とした。尚、ここでのインフォーマルな言語とは、同クラスの児童間で日常的に交わされる、平易で簡略化された言語表現をとらえている。

3 研究の方法

(1) 手立て (クラス全体)

ア 授業の構造化

研究の手立ては、クラス全体に対してと個への手立てに分けて考えた。はじめに全体への手立てだが、授業の中で、教育的ニーズのある児童を含め、児童相互が言語を介して関わり合う活動を構造的に入れ込んだ(第1図)。これは広島大学教授 深澤広明の提唱した「学習形態の交互転換のある授業」モデルの試案を参考にした。理由は学習の流れが自然で学校現場にも日常的に取り入れやすいと思われたからだ。そして学習形態の工夫などを通し、発言等が苦手な児童がインフォーマルな言語を介した活動を十分時間をかけて行うことで、内言と外言の相互交換が行われ、数学的な思考も深まると考えた。



第1図 授業の流れの構造化

ここでは

内言＝音声を伴わない自分自身の為の内的言語

主として思考の道具としての機能

外言＝他人に向かって用いられる音声言語

主として伝達の道具としての機能

ととらえる。思考が深まるということは内言が発達することである。そして、外に発する外言の蓄積が更なる内言の発達を可能にする。そこで、授業において思考の結果として発せられるフォーマルな発言(ルールに則り、期待される回答)ではなく、思考の過程で生

じる自分への問いかけとなるようなインフォーマルな発言(内言につながる)に注目し、それらの効果的な相互作用を考え、授業を構造化した。

ヴィゴツキー(1896-1934)の提唱した「発達の最近接領域」の理論に関連して、佐藤(2004)は「ヴィゴツキーは、子どもの精神発達は他者とのコミュニケーションを内化する過程であると言う。彼は『一人で到達できる段階』(現下の発達水準)と『他者の援助によって到達できる段階』(明日の発達水準)の間のゾーンを『発達の最近接領域』と名付け、教育は『発達の最近接領域』に合わせて行うべきであると提唱した。」と述べている。本研究では一人で到達できる段階(一人思考)からペア・グループ学習(他者とのコミュニケーションを通して内言と外言が相互作用する活動)によって、児童に望ましい変容が見られると考える。

イ インフォーマルな言語活動について

- ・児童間で普段交わされる平易な言語表現でよい。(いわゆる“話し言葉”)
- ・様々な習熟度の児童がペアやグループを編成し、そこで行われる小単位の学習が主たる場面になる。
- ・個人内では“分かっている”児童が、周囲に教えることで自己の理解度を客観視する。また、理解が浅く、自信がなかった児童が周囲の発言などから自己の考えを確認できる。

ウ その他の手立て

- ・グルーピング=男女混合4人班(人間関係や能力差を考慮)
- ・本時の流れを導入で提示(黒板に掲示)
- ・学習シートの工夫 ・具体物の操作

エ クラスの様子

4月以来、学級担任の指導の下、話し方・聞き方の型がしっかり入っており、クラスとして言語活動へのスキルは高い。友だちの意見をしっかり聞くことを大切に学級経営が進められ、とても親和的で温かいムードがある。話し合い活動では、児童が互いの意見や考えを「聴いて・考えて・つなぐ」ことを担任は目指している。そのため、児童は一斉授業での話し合いにも慣れ、かなり高度な討論もできる力がある。しかし、一部の児童に活躍が偏りがちである。また、グループ単位での話し合い活動には馴染みが薄いという実態がある。

(2) 研究対象児童

ア 教育的ニーズのある児童(A~D児 4名)

ある小学校中学年を対象にアセスメントを行った。方法としては授業参観を行い、学級担任や学校長との協議、更には授業参観の記録ビデオをもとに、県立総合教育センター(教育相談センター)に勤務の教育心理相談員にもアセスメントに協力してもらい、A~D児4名の児童を研究対象に決定した(第1表)。

第1表 対象児童の実態

A児	B児	C児	D児
<ul style="list-style-type: none"> ・入学以来、登校渋りがある。 ・集団生活に馴染めず苦勞 ・言語活動には消極的で大人しい印象 ・算数が得意だが全体への発表活動が苦手である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・平仮名の読み書き、計算に時間がかかる。 ・授業中の反応が曖昧なことが多い。 ・一人思考では理解ができない場面が多く、一斉授業ではあまり発言できない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・平仮名の読み書き、計算に時間がかかる。 ・早い段階から基礎的な学力が低い。 ・考えることを避け、安易に甘える様子もある。 ・黒板の文字を写すのに時間がかかる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登校渋りができた。 ・平仮名の読み書きに時間がかかる。 ・書字が乱れる。 ・授業への集中が続かず、ぼーっとすることが多い。

イ 教科の選定

教科の選定については、中学年の実態として算数嫌いの児童が発生しやすいこと、また研究対象のB、C、D児についても算数が苦手で、1学期の評価では全観点で低い位置にあることから、今回、算数科の授業を

通して、研究を進めていくことにした。また、算数科では数・式・図・表・グラフなど幅のある表現活動が期待できることも考慮した。

(3) 研究の実際【検証授業】

単元名	「分けた大きさの表し方を考えよう（分数）」
単元時数	12時間
授業時数（筆者が担当）	5時間

単元の評価規準

算数への関心・意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形についての技能	数量や図形についての知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・分数を用いると整数で表せない等分としてできる部分の大きさや端数部分の大きさを表すことができるなどのよさに気付き、進んで生活や学習に活用しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・等分してできる部分の大きさや端数部分の大きさを表すとき、単位分数の幾つ分かで表すことを考えている。 ・簡単な場合について、分数の加法及減法の計算の仕方を考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・等分してできる部分の大きさや端数部分の大きさを分数を用いて表すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・分数が用いられる場合や分数の表し方について知り、分数の意味について理解している。 ・分数の構成や分数の大きさなどについての基礎的な知識をもっている。 ・簡単な場合について、分数の加法及び減法の意味を理解している。

指導と評価の計画（全12時間）

☆（★）検証授業

1～3時間のねらい・・・前学年の復習、単位量・等分について意識する。1/3mは1mを3等分した1つ分として理解する。分数の大きさは単位分数の幾つ分かで表すことを理解する。（授業者は担任）

時間	ねらい	評価規準（評価方法）			
		算数への関心・意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形についての技能	数量や図形についての知識・理解
4 ☆	「分数」「分母」「分子」の用語の意味を知り、液量についても、端数部分の大きさを分数で表せることを理解する。			1Lを等分し、それをどこか集めた大きさを、分数を用いて表すことができる。（シート記述の分析・観察）	分数、分母、分子の意味を理解している。（ノート記述・振り返りシート分析）
5	等分することや、単位分数の幾つ分かで大きさを表すことの理解を深める。	分数物差しを作って、身の回りの物を測る活動に取り組んでいる。（学習活動の観察・ノート記述の観察）	分数は都合に応じてn等分して表すことを考えている。（学習活動の様子）		
6 ☆	数直線に表された分数を読み取り、分数の大きさの表し方や大小について理解する。			数直線に表された分数の大きさを読み取ることができる。（シート記述の分析・観察）	5/5は1と等しい大きさであることを理解している。（シート記述の分析・観察）
7 ☆	単位分数の幾つ分という表し方を基に、基準量を超える大きさも分数で表せることを理解する。		整数や小数と同じように、単位の幾つ分として分数をとらえて考え、説明している。（シート記述の分析・観察）		単位量を超える大きさも分数で表せることを理解している。（シート記述の分析・観察）
8 ☆	分母が10の分数と1/10の位までの小数の関係について理解する。				数直線上に表された1/10を単位とした分数について、その大きさや小数との関係を理解している。（シート記述・練習問題の分析・観察）
9 ★ 10	分数の加法及び減法について理解し、計算ができる。		単位分数の幾つ分かで考えると、整数と同じように分数の加減計算ができることを考え、説明したり、まとめたりしている。（シート記述の分析・観察）	分数の加減計算ができる。（シート記述・練習問題の分析・観察）	分数の加減計算の仕方を理解している。（シート記述・練習問題の分析）

11～12 時間目のねらい…学習内容の定着を確認し、理解を確実にする。(授業者は担任)

★**検証授業** 本時時数 9 / 12

●**本時の目標** 分数の加法及び減法の計算の仕方について理解し、それらの計算ができる。

●**本時の評価規準** (数学的な考え方)

単位分数の何こ分かで考えると、整数と同じように分数の加減計算ができることを式や図を用いて考え、説明したりまとめたりしている。

●**対象児童について「目指す児童の姿」**

A児	<ul style="list-style-type: none"> ・自力解決時に、分数のたし算について、自分の考え方を1つ以上シートに表現している。 ・ペア・グループ学習でたし算の考え方を意欲的に説明している。 ・グループの友だちの考えを聞いて、表情や言語で反応している。 ・授業のまとめで自分の考えを発表する。
B児	<ul style="list-style-type: none"> ・自力解決時に分数のたし算について、わかっていることをシートに書く。(例：1リットルますの絵をかく。) ・ペア・グループ学習で自分が何を書いたかを友だちに話す。 ・「〇〇さんのやり方がいい」「わかりやすい」「あ、そうか。なるほど」などと反応している。
C児	<ul style="list-style-type: none"> ・自力解決時に分数のたし算について、わかっていることをシートに書く。(例：1リットルますの絵をかく。) ・ペア・グループ学習で自分が何を書いたかを友だちに話す。 ・「〇〇さんのやり方がいい」「わかりやすい」「あ、そうか。なるほど」などと反応している。
D児	<ul style="list-style-type: none"> ・自力解決時に分数のたし算について、わかっていることをシートに書く。(例：1リットルますの絵をかく。) ・ペア・グループ学習で自分が何を書いたかを友だちに話す。 ・「〇〇さんのやり方がいい」「わかりやすい」「あ、そうか。なるほど」などと反応している。 ・ペア・グループ学習で分数のたし算について、友だちに質問する。

●**本時の学習**

	学習活動 児童の反応例 (C)	指導上の留意点 (★)	研究対象児童への留意点 (☆) 評価 (*)
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の流れを知る。 ・前時の学習を振り返り、本時の学習を知る。 ・問題を読み、題意をとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ★授業の見通しを持たせる。(板書掲示) ・$1/10=0.1$ ・$2/10$は$1/10$の二つの大きさである。(板書) 	
	ジュースがペットボトルに $3/10L$ 、びんに $2/10L$ 入っています。合わせて何Lありますか。		
	C… $5/10$ だよ。たし算するんだよ。 C… 「合わせて」だから。 ・式 = $3/10 + 2/10$ を確認する。(全体)	★なぜ、たし算なのか。児童から答えさせたい。	
	3/10 + 2/10 の答を考えよう。どうしてその答になるのかをシートに書いてみよう。		
自力解決 8分	<ul style="list-style-type: none"> ・学習シートに $3/10 + 2/10$ の答と、どうしてその答になるのかを考えて表現する。 C… $3/10L = 1/10L$ が3つ分。$2/10L = 1/10L$ が2つ分。合わせると $1/10L$ が5つ分だから答 $5/10L$。(1Lますの絵を添えて説明する場合もある。) C… 数直線で説明する。$3/10L = 1/10L$ が3つ分。そこに $2/10L = 1/10L$ が2つ分が足されるので。合わせると $1/10L$ が5つ分だから答 $5/10L$。 C… 小数の計算 $0.3 + 0.2 = 0.5$ $0.5 = 5/10$ 	<ul style="list-style-type: none"> ★自力解決・事前指導 ・時間… 8分 ・学習シートの使い方(裏表どちらも使用可。無地とマス目) ・文や絵・図で書く。 ・早く終わった児童は、違うやり方・考えをシートに書く。また、わかりやすい説明ができるように話し方考える。 ・自分で似たような問題を作り、答を出す。 ★ペア・グループ学習で取り上げたい考えや説明を書いている児童にを励まし、グループ学習の意欲づけをする。 ★全員がシートに記入した上で、ペア・グループ学習に移る。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆学習の様子を見て、手が全く進んでいないようだったら、まず1リットルますの絵をかく方向に助言する。(B・C・D児) ☆1リットルますの絵を全くかけない場合は、補助シートを渡す。(B・C・D児) ☆シートに書かれた児童の考えをほめ、後のペア・グループ学習で、発表できるよう励ます。(A児) ☆B・C・D児の助けになるであろう児童に対し、ペア・グループ学習での支援のアドバイスをする。自分の考えを声に出して説明させる。
ペア・G 解決 15分	<ul style="list-style-type: none"> ・まず、近くの友だちと考えを伝え合ったり、教え合ったりする。 ・4人グループで考えを伝え合ったり、教え合ったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ★ペア・グループ解決・事前指導 ・時間… 15分 ・自分のシートに書いた、文や絵・図を使って、友だちに説明する。 ・自分ばかり話すのではなく、友だちの考えも聞く。 ・わからない児童に教えてあげてもよい。但し、教え合いのルールを守る。(・教える側…ただ答だけを教えたり、写させたりしない。考え方を教える。) ・聞く側…どこまで自力解決できたか、相手の児童に伝える。) ・早く終わったペア・グループは、違うやり方・考えをシートに書く。また、わかりやすい説明ができるように話し方考える。 ・似たような問題を作り、友だちと出合う。 ★自力解決で出していた、考え(途中も含む)をペアやグループで表現できない児童に対して、シートに書かれた考えをほめ、発表を促す。(B・C・D児) 	<ul style="list-style-type: none"> ☆自力解決で出していた考え(途中も含む)をペアやグループで表現できない児童に対して、シートに書かれた考えをほめ、発表を促す。(B・C・D児) ☆友だちの考えを聞いて、どう思ったか。(わかりやすいか)教師が発言を促す。(B・C・D児) ☆友だちの考えに付け加えや意見はないか、発言を促す。(A児) ☆状況を見て、まとめの発表に向けて励まし、助言する。(A児)
	近くの人とペアになって、 $3/10 + 2/10$ の答と、どうしてその答になるのか、発表し合おう。よい考えを自分のシートにメモしよう。		
	インフォーマルな言語活動		
	*【数学的な考え方】 単位分数の何こ分かで考えると、整数と同じように分数の加減計算ができることを式や図を用いて考え、説明したりまとめたりしている。		

ま と め 1 7 分		<p>トに書かれた考えをほめ、発表を促す。</p> <p>★ $3/10L = 1/10L$ が3つ分。 $2/10L = 1/10L$ が2つ分。合わせると $1/10L$ が5つ分だから答 $5/10L$。1L ますの絵を使って説明することを軸に、机間支援の過程で、本時のまとめ方を検討する。(全体での発表を指名する児童の選出)</p> <p>★ 児童の学習状況を見て、まとめでの発表に向けて、発表させたい児童に対して励まし、助言する。</p>	
	<p>$3/10 + 2/10$ の答と、どうしてその答になるのか、発表しよう。(全体)</p> <p>・ $3/10L = 1/10L$ が3つ分。 $2/10L = 1/10L$ が2つ分。合わせると $1/10L$ が5つ分だから答 $5/10L$ を全体で確認する。 C …いくつ分 = 分子の数だ</p> <p>・ 今日の学んだことを確認する。 「分数でもたし算ができる」 「$1/10L$ の○つ分を求めること」 ・ 適用問題を解く。 $4/10 + 3/10$ など分子は10の計算にする。 ・ 振り返りカードを書く。</p>	<p>★ 「$1/10L$ が5つ分だから」を児童から出させたい。</p>	<p>☆ 状況を見て、A児を発表させたい。 ☆ 様子を見て、学んだことの繰り返しや適用問題でB・C・D児に発言させたい。</p>
	<p>【授業記録(第1時～第4時)】 担任・校長等がA～D児の様子を記録</p>	<p>本時の記録 記録・ビデオ(2台) 4名でA～Dの様子を記録</p>	

● 個への手立てと変容

以下がA～D児について個への手立てと変容についてである。

【A児】

[手立て]

◇ グルーピングの配慮

- ・ 人間関係を考慮し、C児と同じグループにした。個人内では理解できた内容を周囲にわかるように説明する過程でより理解が進むことを期待した。

◇ 賞賛場面の設定

- ・ 普段、一斉授業の中では積極的に発表できない傾向があるが、ペアやグループでの学び合いを通して、自信を深めさせたい。
- ・ まとめの段階での発表等、活躍の場を設定したい。

◇ 課題が早く終わった後の指示を事前しておく。

- ・ 別の考えをシートに書くなど暇な時間を作らない。

[変容]

- ◎ ペア学習での説明を基に、グループでは工夫を加え、わかりやすく説明していた。
- ◎ 友だちの考えをよく聞き、反応していた。
- ◎ まとめの段で全体へ発表ができた。

★ ペア→グループ→全体と段階を踏んで学習したことで、A児の自信が高まった。説明もわかりやすく変わっていった。

【B児】

[手立て]

◇ グルーピングの配慮 (人間関係)

◇ 学習シートの配慮

- ・ 補助シートを用意した。(1L ますが記入済み)

◇ 自分の学習状況を把握できるよう、こまめに声をかける。何かしら自分の考えを学習シートに記入させ、ペア学習に臨ませた。理解の度合いに沿って、B児の学習の見通しや支援のアドバイスを周囲の児童に助言する。

[変容]

- ◎ 一人思考で自分の考えの一部を書く。

○ ペア、グループ学習で考えを出せなかったが、聞く姿勢はよい。

◎ まとめの段階で、何人かの友だちの意見を参考に、学習シートを自力で分かりやすくまとめた。

【C児】

[手立て]

◇ グルーピングの配慮

- ・ A児との人間関係を考慮し同じグループにした。
- ・ 「わからない。」と言いやすいメンバーにした。

◇ 学習シートの配慮

- ・ 補助シートを用意した。(1L ますが記入済み)

◇ 基本的な事項を再確認しつつ、自分の学習状況を把握できるよう、こまめに声をかける。何かしら自分の考えを学習シートに記入させ、ペア学習に臨ませた。理解の度合いに沿って、C児の学習の見通しや支援のアドバイスを周囲の児童に助言する。

[変容]

- ◎ 一人思考で自分の考えの一部を書く。

○ ペア、グループ学習で考えを出せなかったが、前向きな表情で取り組んだ。

○ 友だちのリードで学習シートに1L ますの正確な絵をかいた。

【D児】

[手立て]

◇ グルーピングの配慮 (人間関係)

◇ 学習シートの配慮

- ・ 補助シートを用意した。(1L ますが記入済み)

◇ 自分の学習状況を把握できるよう、こまめに声をかける。理解の度合いに沿って、D児の学習の見通しや支援のアドバイスを周囲の児童に助言する。また、D児は欠席が続いていたので、随時、学習状況を見て、助言を行う。表情や集中力の度合いを見て、声をかける。

[変容]

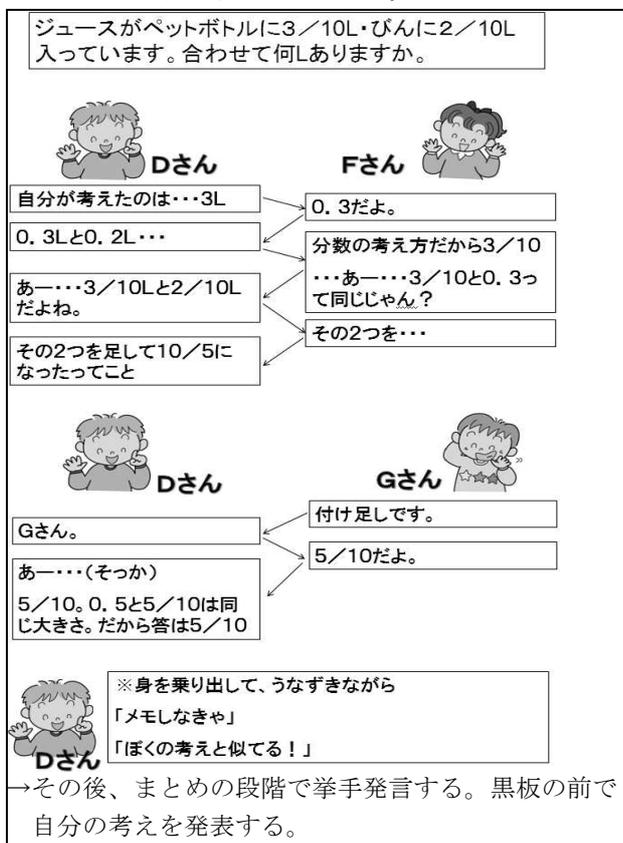
- ◎ 一人思考で自分の考えの一部を書く。

◎ インフォーマルな言語を多用して、ペア、グルー

プでは自分の考えを積極的に説明した。また、友だちの考えを聞き、「僕の考えと似ている！」など反応していた（第2図）。

◎挙手をして、黒板を使って考えを説明できた。

★段階を踏んで学習したことで、D児の自信が高まった。インフォーマルな言語が交わされ、相互に言語活動がしやすい場になっていた。



第2図 D児のグループ学習の様子

4 考察

個人差はあるが、対象児童について目指す児童の姿に迫る変容が認められた。これらを考察すると、検証授業以前は取組みのなかった、自力解決後にペア学習を経てグループ学習に進むというスモールステップの学習過程、また、そこでの時間をかけた十分な思考の保障が大きかったのではないかと考える。ペアやグループでインフォーマルな言語を介した思考のシェアはクラスの随所で見受けられ、特にD児の変容は目覚ましいものがあった。このように授業の流れの中で児童相互の関わりのある授業づくりを構造的に入れ込むこと、また言語活動が苦手な児童も参加しやすいインフォーマルな言語を介した活動を取り入れることで一定の効果が認められた。児童の更なる変容を目指すためには、アセスメントの継続的な深化とともに、例えば一人思考時での個に応じた支援策の改善が考えられる。特に今回はペアやグループでの関わり合い・学び合いに視点を置いたため、授業や教材研究で「どこまで支援の手を差し伸べるか。」が難しかった。具体的には補

助的な学習シートをもっと早く出すことや、適宜、学習支援員を活用することで効果的な学習に更につながったのではないかと考える。

いずれにしても『一人で到達できる段階＝一人思考』から『他者の援助によって到達できる段階＝ペア・グループ学習（他者とのコミュニケーションを通して内言と外言が相互作用する活動）』によって、児童の主体的な言語活動が展開され、支援の効果の一端を確認することができた。今後、通常の学級における教育的ニーズのある児童を含めた、言語活動を中心とした授業実践は益々重要である。様々な機会の研究を重ねていきたい。

おわりに

児童・生徒の抱える教育的なニーズは、日々複雑化・多様化しており、通常の学級での授業における効果的な支援に関する研究は、今後、ますます重要になってくると思われる。学校教育は全ての子どもに学びを保障し、個々の成長を支え、将来の社会自立に向けての様々な力をつけていくことを使命とする。今後も更なる研究・修養に努め、現場の教育力を結集しつつ、よりよい実践を求めていきたい。

引用文献

- 神奈川県教育委員会 2007 「かながわ教育ビジョン」
- 神奈川県教育委員会 2008 「支援教育」
- 佐藤学 2004 『習熟度別指導の何が問題か』 岩波書店 p.62

参考文献

- 神奈川県立総合教育センター 2010 『明日から使える支援のヒント～教育のユニバーサルデザインをめざして～』
- 神奈川県立総合教育センター 2012 『支援を必要とする児童・生徒の教育のために』
- 西川純 2008 『気になる子の指導に悩むあなたへ』 東洋館出版社
- 服部四郎 1974 「言語の構造と機能」(大河内一男『東京大学公開講座 言語』) 東京大学出版会
- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 算数編』
- 吉田茂孝 2010 「特別支援教育における『学習形態の交互交換のある授業』モデルの構造」(高松大学『研究紀要』第52・53合併号)
- ヴィゴツキー 2009 「『発達の最近接領域』の理論」 三学出版